WAU

芸能・映画・ごはん… ディープに伝えるマレーシア文化通信

Malaysia Cultural Post

［ワウ］
No.8
2016
6月号

マレー凧Wau〈ワウ〉のように、色鮮やかで誇り高いマレーシアの伝統芸能、ごはん、映画に焦点をあて、専門家がディープにご紹介する**フリーペーパー**

TAKE FREE

ブルハヌディン社長

マレーの伝統衣装を身につけたウピンとイピン

マレーシアの日常を描いた Upin & Ipin® 人気アニメ誕生秘話

制作会社LES COPAQUE社長
ハジ・ブルハヌディン氏インタビュー
Mr. Haji Burhanuddin Md Radzi

取材・文：Togari Yasuko
誌面構成：Aki Uehara
(Mutiara Arts Production)
写真提供：Les Copaque

マレーシアで大人と子ども、そして私も大好きな大人気のアニメシリーズ「ウピン&イピン(Upin & Ipin)」。是非日本の人たちにも知ってほしい! というわけで、2016年2月、クアラルンプール郊外にある制作プロダクションの事務所を訪問し、ブルハヌディン社長にお話を伺ってきました。

「ウピン&イピン」は、いたずら好きの双子の兄弟ウピン君(兄)とイピン君(弟)が主人公のアニメーションです。亡くなった両親の代わりに2人を育てる優しいオパー(おばあちゃん)、ちょっと怖いけれど2人のことを大切に思っている姉のローズ、そして彼らの友達や村に住む人々の生活が生き生きと描かれています。2007年にシーズン1が放送されると、瞬く間に人気になり、現在シーズン10が放送されています。

「ウピン&イピン」を制作するLes Copaqueのブルハヌディン社長。実は以前は全く畑違いの石油・ガス産業で働いていました。2006年に退職し、アニメ業界に転身。当時、マレーシア政府もアニメーション産業に注目し、助成金を出していましたが、想定されていたのは欧米風のアニメーションでした。しかしブルハヌディン社長は、マレーシアの日常生活を描いたアニメーションが作りたかったと言います。

「アニメーションはディテールを描くもの。それを描くためにはその環境にいかなければいけない。マレーシアから出たことがないスタッフが、欧米の話を作ることはできない。2006年当時マレーシアで放映されるアニメは全てアメリカや日本から輸入されていた。だからこそ自分たちの文化や日常生活を描いたアニメを作りたいと思ったんだ。だから村の生活をもとにした『ウピン&イピン』を作ったんだよ」。

実はウピンとイピン、最初は主人公ではなく、ある映画の脇役として作られたキャラクターだったそうです。その映画の制作中、視聴者の反応を試してみるために、2人を取り出して、地元のテレビ局で6回シリーズで放送してみたところ大ヒット、テレビアニメはシリーズ化、映画の方も彼らの名前が冠されることになりました。出世作となった最初のテレビシリーズは、2007年のラマダン(断食)月に、ウピンとイピンが初めての断食を経験するというエピソードが放送されました。

「イスラムの要素を入れたのは、マレー系のコミュニティの関心を集めるためだった。マレー系の人たちはイスラム的な内容を入れると喜ぶからね。そして大ヒットになったんだよ。最初の6本が放送された後、もう12本作ってくれと言われたんだ。その後、本格的に1年間のテレビシリーズ化することになり、イスラムの要素だけではなく、文化や日常生活の要素を増やすことにしたんだ」。

マレーシアで大人気になった「ウピン&イピン」は、その後インドネシアでも放送され、マレーシア以上ともいえる人気になります。さらにディズニーチャンネルを通してその他の東南アジア各国や、トルコでも放送されています。日本で放送されることはないのでしょうか?

「日本は少し難しいかも知れないね。でも円谷プロとはコラボをしているんだよ」。

そう!なんと、2014年と2015年に、ウルトラマンが登場するエピソードがそれぞれ3回ずつ放送されているんです。その名もずばり「ウルトラマン・リブット(ributはマレーシア語で「嵐」という意味)」。「ウピン&イピン」の中でしか見られない、かなりレアもののウルトラマンです。いつか日本でも見たい!

「ウピン&イピン」シーズン1のポスター

「ウピン&イピン&ウルトラマン・リブット」のポスター

ウピン　イピン

戸加里 康子
マレーシア語講師、通訳、翻訳者。Les CopaqueのYouTubeチャンネルで、『ウピン&イピン』に日本語字幕をつける企画をこっそり画策中。

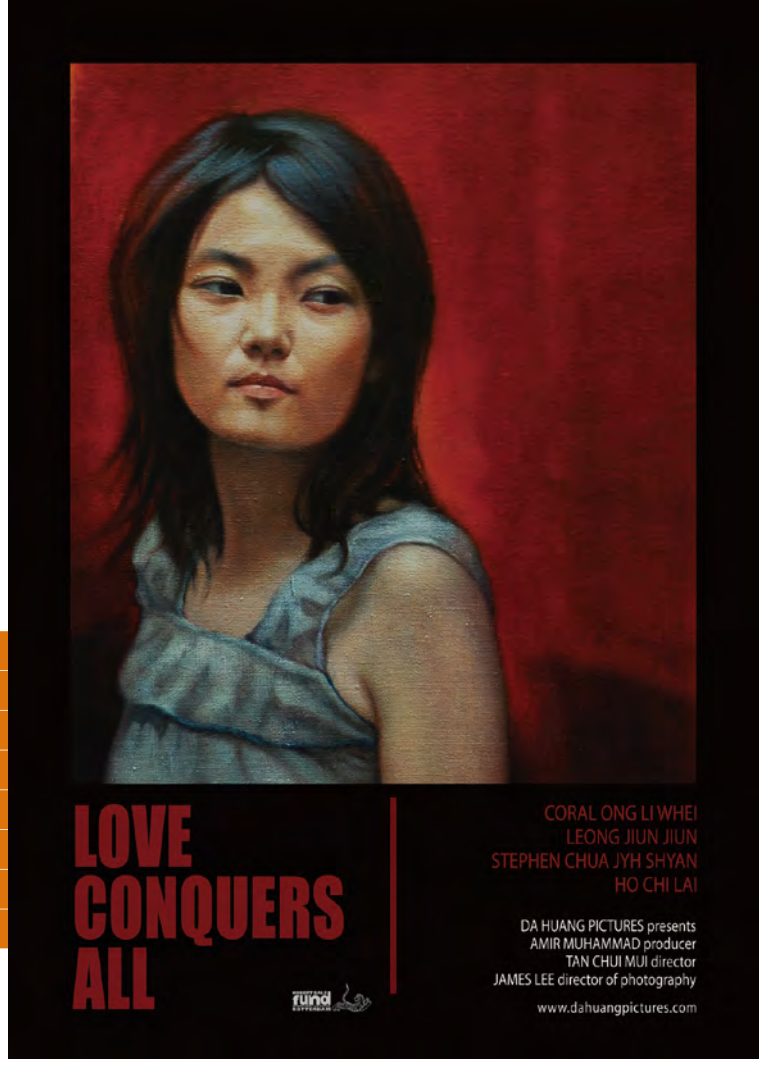
【今号の表紙について】 マレーシアでは、日本やアメリカのアニメーション作品が長年親しまれてきましたが、近年、マレーシア国内で制作される作品が注目されています。今号は、マレーシアで大人気のアニメ『ウピン&イピン』をおそらく日本で最もよく観て、その魅力を知るマレーシアの専門家、戸加里康子さんによるスペシャルインタビューです。

Now is a very good time to start again!

マレーシア・ニューウェーブの次世代、はじまる

取材・文 Rie Takatsuka（株式会社 ODD PICTURES）
写真提供 Tan Chui Mui
取材協力 Short Shorts Film Festival & Asia

2016年6月2日(木)より、国内唯一の米国アカデミー賞公認、アジア最大級の「Short Shorts Film Festival & Asia」(*以下SSFF/概要は下記参照)にて、昨年に引き続き「東南アジアプログラム&シンポジウム」が開催されます。今年は、ベトナム、ブルネイ、タイ、ミャンマー、マレーシアの5カ国が特集され、マレーシアからは、WAUでも何度かお伝えしてきた"マレーシア・ニューウェーブ"の中心人物の一人、タン・チュイムイ氏がパネラーとして来日します。今回はSSFFのご協力により、先立ってタン・チュイムイ氏にお話を伺いました。



マレーシア・ニューウェーブのブレイクのきっかけとなった、映画「愛はいっさいに勝つ」Love Conquers All

WAUで、何度かご紹介してきたマレーシア・ニューウェーブですが、ここでもう一度、タン・チュイムイ氏の言葉で紹介しましょう。

※マレーシア・ニューウェーブの記事については、WAU創刊号、2号、3号参照。Hati Malaysiaのウェブサイトからの PDFでご覧になれます。

マレーシアのインディペンデント映画は、2000年、**アミール・ムハマド**※1監督のデジタル長編映画"Lips to Lips"とともに始まりました。デジタル制作は、当時とても斬新なことでした。彼は多くの若い映画人を集めて映画を撮っており、2001年、まだマルチメディア大学の学生だった私も、彼の活動に参加しました。私たちは学校や仕事の傍ら集まっては、ひっきりなしに映画の話をし、頻繁に新しい映画を作っていました。この頃、**ウー・ミンジン**※2を撮影監督とし、私はセカンドカメラとして、そして**ジェームズ・リー**※3がプロデューサーとして、アミール・ムハマドの『ザ・ビッグ・ドリアン』を撮りました。その後、私は、2004年のロッテルダム国際映画祭、釜山国際映画祭でも優秀な成績を収めた**ホー・ユーハン**※4の『霧』のプロデュースと編集に携わり、翌年には、私自身の監督作"A Tree in Tanjung Malim"が、ロッテルダム国際映画祭が東南アジアの長編映画に特化した「S.E.A Eyes」のコンペティションに選ばれました。

2005年、私たちは、映画人のための映画人によるプロダクションとして「ダー・ファン・ピクチャーズ」を設立しました。

私たち(アミール・ムハマド、私、ジェームズ・リー、ホー・ユーハン、リュウ・センタット、ウー・ミンジン、アザール・ラディン)は、時には監督、時にはプロデューサー、役者、編集者、カメラマンとして、お互いに役職をシャッフルしながら、2〜3週間おきに新しい作品を作りました。

この頃から、私たちのマレーシア映画は、国際映画祭から大きな注目を集め始めました。

2006年に、私の映画、『愛はいっさいに勝つ』が釜山国際映画祭、2007年にはロッテルダム国際映画祭で賞を獲得し、続いて2008年には**リュウ・センタット**※5監督の『ポケットの花』も同じくロッテルダム国際映画祭に通ります。この頃、マレーシア・ニューウェーブはそのピークにありました。私が映画祭のために出かけるときは、出会うすべてのプログラマーに渡すつもりで、バッグの中を友人監督の映画のDVDでいっぱいにしていました。」

日本では、2006年の第19回東京国際映画祭「アジアの風」部門にて、《マレーシア映画新潮》と題し、全9作品が紹介されました。その後、ピークを過ぎたマレーシア・ニューウェーブは、急速に縮小していきました。それぞれが、それぞれの道を歩み始めたのです。タン・チュイムイ氏は、大陸での活動を選びました。

その後、私は、北京の映画制作シーンに携わりました。中国は私にとって、とてもエキサイティングな国でした。濃縮された素晴らしい文化がそこにありました。私はジャ・ジャンクーをはじめとする中国のフィルムメーカーと交流を持ち、その知識を吸収しました。マレーシアに戻った今、私は本当にそれが恋しいです。

現在、タン・チュイムイ氏は、マレーシア・ニューウェーブの次世代とも言える映画人をサポートすべく、「ネクスト・ニューウェーブ」という活動を開始しています。

私は今、マレーシア国立映画開発公社(FINAS)の助けを借りて、若い映画制作者のためのプラットフォームを作成し、ネクスト・ニューウェーブのプロジェクトに取り組んでいます。その目標は、東南アジア地域からの指導者や映画関係者の助けを借りて、マレーシアの映画人の映画作りを応援することです。優れたプロデューサーや脚本家を育成し、より多くの映画人を奨励するべく、それに特化したワークショップも開催します。私はマレーシアの若い映画人には、マレーシア・ニューウェーブの歴史について学んで欲しいと思っています。しかし、なによりも、彼らがより多くの映画を作ることを望んでいます。

私は、今後、マレーシアから発信されるエキサイティングな映画をみなさんに見て欲しいと思っています。時間はかかるかもしれませんが、絶対にその日が来ると確信しています。ネクスト・マレーシア・ニューウェーブは、今がチャンスなのです。

今、彼女は、長年、執筆活動に注力し、映像制作から離れていたというアミール・ムハマド氏のドキュメンタリープロジェクトの撮影を終えたところで、完成するのをとても楽しみにしているようです。この話の続きは、SSFFのシンポジウムで彼女の話を聞くこととしましょう。そして次世代のマレーシア映画を会場で是非ご覧になってみてください。

監督・作家・プロデューサー タン・チュイムイ

Tan Chui Mui

1978年生まれ。マレーシア・ニューウェーブと呼ばれたインディペンデントフィルムメーカーの一人。2006年、長編処女作『愛はいっさいに勝つ』(Love Conquers All)が釜山国際映画祭のニューカレンツアワード受賞、2007年には、マレーシア人初のロッテルダム国際映画祭タイガーアワードを受賞したことがきっかけとなり、マレーシアインディペンデントフィルムメーカーの存在が国際映画祭で注目されるようになる。現在は、ロッテルダム、釜山、クレルモンフェラン、上海国際映画祭の審査員などを務め、国内メディアのコラムニストなどとしても活動。2015年、マレーシアの若手映画人の育成を目的としたネクスト・ニューウェーブを設立。

国際映画祭で活躍したMalaysia New Waveたち

※1
アミール・ムハマド
Amir Muhammad

インディペンデントフィルムメーカー。ジャーナリスト。タン・チュイムイらと共に「ダー・ファン・ピクチャーズ」創設。"Lips to Lips"は、2000年に製作されたデジタル処女作。『ザ・ビッグ・ドリアン』(2003)はドキュメンタリーとフィクションのハイブリッド作品。山形国際ドキュメンタリー映画祭2003「アジア千波万波」で特別賞を受賞。サンダンス映画祭ではマレーシア作品として初上映された。

※2
ウー・ミンジン
Woo Ming Jin

映画監督。『マンデー・モーニング・グローリー』(2005)でロカルノ、トリノ、ヴェネチア、釜山、ロッテルダム、東京国際映画祭、『タイガーファクトリー』(2010)もカンヌ映画祭にノミネート他、多数の実績を持つフィルムメーカー。『盗人の第二の人生』(2014)は釜山国際映画祭にてワールドプレミア上映後、翌年、東京で開催されたマレーシア映画ウィークでも上映された。

※3
ジェームズ・リー
James Lee

「ダー・ファン・ピクチャーズ」共同創設者。『私たちがまた恋に落ちる前に』(2006)は、タン・チュイムイの『愛はいっさいに勝つ』と共に、2006年の東京国際映画祭「アジアの風」部門の《マレーシア映画新潮》にて紹介されている。現在は、オンライン配信にも力を入れ、「Doghouse73Pictures」を設立。若手監督のプロデューサーも務める。(WAU 3号に掲載)

※4
ホー・ユーハン
Ho Yu Hung

『サンクチュアリ』(2004)では、ロッテルダム国際映画祭や釜山国際映画祭で高評価を得る。日本でも公開された『レインドッグス』(2006)は、香港の俳優、アンディ・ラウがエグゼクティブプロデューサーとなっており、ナント三大陸映画祭、香港アジア映画祭で最優秀賞受賞。『心の魔』(2009)はロカルノ国際映画祭NETPAC賞、アジア映画祭最優秀アジア映画賞受賞。

※5
リュウ・センタット
Lew Seng Tat

『ポケットの花』は、2007年釜山国際映画祭にてニューカレンツ部門、観客賞、2008年ロッテルダム国際映画祭にてタイガーアワードを受賞。同年、東京国際映画祭「アジアの風」部門でも上映された。最新作『世界を救った男たち』は、2015年マレーシア映画祭最優秀賞作品賞受賞。今年6月25日、26日に横浜シネマ・ジャック&ベティにて上映予定。(WAU 7号掲載)

後ろにリュウ・センタット監督の姿が

ニューウェーブの仲間とのなつかしいひとコマ

Short Shorts Film Festival & Asia

今年で 18 年目となる同映画祭。コンペティション部門では、アジアはもちろん、世界中、約 5000 もの応募作の中から選りすぐられた作品が上映されます。

2016.6.2[木]−6.26[日]

東南アジアプログラム&シンポジウム ～東南アジアのショートフィルムの現状と展望

東南アジアの映画業界と今最新の映画製作事情をお伝えします！

ベトナム・ブルネイ・タイ・ミャンマー・マレーシア
5カ国の作品は同時上映されます。

日によって会場、上映時間が違うのでご注意ください。
詳しくは Web サイトなどでご確認ください。
http://www.shortshorts.org/southeast_asia/symposium/

上映プログラム（入場無料）

6/ 5［日］11:30 - 13:10 ブリリアショートショートシアター（横浜）
6/ 17［金］19:30 - 21-30 ブリリアショートショートシアター（横浜）
6/ 19［日］11:30 - 13:10 シダックス・カルチャーホール（渋谷）
6/ 21［火］13:30 - 15:10 ブリリアショートショートシアター（横浜）
6/ 24［金］19:30 - 21-10 iTSCOM STUDIO & HALL 二子玉川ライズ

シンポジウム（入場無料 / タン・チュイムイ氏登壇）

6/ 19［日］13:30 - 15:10 シダックス・カルチャーホール（渋谷）

東南アジアプログラム & シンポジウム主催
ショートショート実行委員会　国際交流基金アジアセンター

History of Malaysian Chicken Rice Spirit

取材・文・撮影
Oto Furukawa
(Malaysia Food Net)

マレーシアのローカルフードのなかで、絶大な人気を誇るチキンライス。ふっくらゆでた鶏肉とゆで汁で炊き上げた香り米の最高のコンビです。マレーシアは、全国いたるところで名店が立ち並び、まるでチキンライス天国。でもそれは、店側からすれば、競争の激しい世界ということ。ペナンで創業40年を迎えたチキンライス店「ファッティ・ロー」。一皿にこめられているのは、店主の生き方であり、家族の歴史でした。

チキンライスの現場で歴史を刻む職人魂

1996年に店を継いだロー氏。すべての工程でみずから腕を振るうのは、大事なレシピを守るためでもある。妻さえもレシピを受け継ぐことができず、継承できるのは息子のみ

1969年、ペナン島で「ファッティー・ロー」は開業。丸テーブルに、椅子はたったの15席。周りにはランブータンやマンゴスチンの木が生い茂っていたといいます。契約農場でチキンライス専用に飼育した丸鶏をていねいに調理し、ゆで鶏とロースト鶏の2種を提供。たちまち評判となり、1日300羽を売り切る人気店に。

チキンライスは、さかのぼること1850年代。中国、海南省から渡ってきた中国人が考案した料理といわれています。海南省の名物料理である文昌鶏（ウェンチャンジー）が原型で、それを東南アジア人の嗜好にあわせてアレンジ。今では、マレーシアだけでなく、シンガポールやタイでも非常にポピュラーです。ちなみに、チキンライス以外にも海南料理に影響を受けたマレーシア料理は多く、その理由としては、海南省とマレーシアでは食材の共通点が多いからだとか。男性が料理をする習慣のあった海南人は、レストランや富豪宅のコックとして活躍してマレーシアで故郷の味を広めた、という説もあります。

ロースト鶏、ゆで鶏（スチームチキン）各RM6～8（部位によって値段が異なる）、ご飯RM1、鶏足サラダRM5、内臓サラダRM5（※RM1＝約30円）

さて「ファッティー・ロー」に話を戻しましょう。現在、店を守っているのは、3代目のロー氏。みずから厨房に立ち、100席を超える大きい店になった今でも、先代から受け継いだレシピはほぼ同じ。副菜から卓上ソースまですべて店で作ります。ゆで鶏とロースト鶏の2種も変わらず。どちらも美味ですが、どちらか1種というなら、ぜひローストを。「アポロ」という伝統的なアルミ製の窯を使って焼き上げた鶏は、しっとりとした薄皮にタレがしっかり沁みていて、口の中で甘みがふわっと広がります。ほかの店では出会えない、ここだけの味です。

ロー氏に将来の展望を聞くと「先のことは考えていない。ただ毎日全力を尽くすだけ」と。どうしてそんなことを聞くの？といわんばかりのすこし困ったような笑顔。毎日全力を尽くすという本気度。それは、客と向き合い、自分の置かれた立場にみじんもの疑問も持たず、いさぎよく前を向く、ということ。そうやって生み出されたチキンライスの味は、人の心を掴み、歴史を作り、決して誰にもまねできない味になったのです。

鶏は契約農場から生の状態で毎日仕入れる。飼育期間は通常よりも10日間長く50日間を指定し、内臓を抜いた状態で2キロ以上のサイズが必須。「おいしさは鶏そのものの品質によるところが大きい」とロー氏

アルミ窯「アポロ」。遠火で蒸し焼きにする。鶏の位置を変えながら皮目を美しく焼き上げるのはプロの技

お米は炊くのではなく蒸す。生姜、ターメリック、パンダンの葉、鶏の脂でコクを出した鶏スープを入れ、専用のスチーマーで45分間蒸す。するとピラフのような味に

Fatty Loh Chicken Rice　大肥羅雞飯
21 Jalan Fettes, Fettes Park, 11200 Penang
営業時間　月 9:30-16:00　火～日 9:30-17:00
※月に1回休みあり
http://www.fattylohchickenrice.com

日本のチキンライス

日本でもチキンライスが食べられます！おすすめのマレーシア料理店はこちら！

東京・横浜
マレーアジアンクイジーン
ふっくら茹でた鶏肉を3種のタレで。鶏の茹で汁で炊いたジャスミンライスもふっくらと美味。980円

東京
ちりぱり
スチーム、ロースト、揚げの3種を用意。激辛の唐辛子醤油“ちりぱり”が名物。500円

東京
ペナンレストラン
スチームとグリルチキンの2種。クリスピーな食感のグリルはビールにもぴったり。680円

東京
マレーチャン
ジューシーな鶏肉はボリューム満点。最近ではチキンライス弁当もたいへん人気。1100円

大阪
ケニーアジア
ツヤツヤのハラール鶏が美味。チリ、レモンジンジャー、醤油の3種のソース。Mサイズ980円

アジアのチキンライス色々

アジア好きユニット「アジアごはんズ」。昨年アジアごはんズ主催で「チキンライス食べ比べ」イベントを開催。4か国のチキンライスをワンプレートで提供しました。その時のプレートをもとに、東南アジア各国のチキンライスの特徴を伝授します！
（写真提供：鈴木さん）

シンガポール
3種（チリ、生姜、黒醤油）のタレが特徴。チリと生姜は鶏肉、黒醤油はご飯にかける。屋台ではなく、ホテルで提供する高級チキンライスも人気で、チキンライスの“セレブ化”は、シンガポールという国の豊かさの象徴ともいえる。
（伊能すみ子　アジアンフードディレクター）

マレーシア
多民族国家マレーシアは、民族や地方によって様々なチキンライスがある。たとえばマレー系のチキンライスは、茹で鶏にクローブや八角の香りをつけたタレをぬり、オーブンでロースト。ご飯はターメリック入りで黄色。マラッカのはご飯がまん丸。
（古川音　マレーシアごはんの会）

タイ
タイ人にとってチキンライスは“牛丼”のような存在。気取らない食事で、持ち帰りにすることも多い。タレは1種で、豆鼓を使った濃厚な味。鶏の血を固めた“ルアットガイ”（血豆腐）をトッピングするのも人気。
（下関崇子　タイ料理家、ムエタイインストラクター）

インドネシア
中国系インドネシア人が自分好みのチキンライスを提供。そのため、共通の味というより店によって色んな味が楽しめる。パクチーソースやハーブで炊き込んだご飯など、どれも手の凝った味。
（浅野曜子　インドネシア料理プロデューサー＋フードコーディネーター）

マレーシアごはんツアー in IPOH
10月 7日→12日（朝着）5日間
マレーシアの食文化を現地でディープに体験！
今回の目的地は、水の綺麗な町イポー。
名物料理を堪能し、
果物農園やモヤシ工場を見学。
マレーシア人とも触れ合います。
マレーシアごはんの会
malaysiafoodnet.com

Hati Malaysia監修レシピ動画 YouTubeで公開中！
AYAM Since 1892
レシピ動画を見て作ろう！
スキャン
アヤムを使って本格アジアン料理
うま味たっぷり！
南国**チキンライス**が
お家で**カンタン**に作れます

WAU gallery

陳家のママのお店で初めてバジュ・クバヤを仕立ててもらったのは、もうかれこれ14年程前のこと。それは断食明けの大祭ハリラヤの2か月ほど前で、お店の中には順番を待つマレー系女性の長い列が！他にも仕立て屋さんはあるのに、どうしてこんなに人気なのかと不思議に思いましたが、まず採寸する箇所がとても多い＝その人の体形により合ったものを作ろうとしているということ。たとえゆったりめのバジュ・クロンであっても、その人の体形に合ったラインで裁断されていると、見た目がずいぶんと違うのです。そう、あくまでもお客さんがそのバジュを着たところが完成図。数年前に仕立ててもらったものをまだ着ていると言うと、「あなたもうサイズが変わってるんじゃないの！？」と怒られるほどのこだわりです（笑）。そして今、私のクローゼットの中には、ウェディングドレスも含めて、ママに仕立ててもらったバジュが15着もあります。（アティカ）

日本と縁が深いマレーシア華人一家を、12才離れている兄弟ふたりがタックを組んでマンガで綴る連載「陳家物語（たんけものがたり）」。第2回は陳ママが経営している仕立て屋「藝美裁縫所（Ee May Kedai Jahit）」について。大工だった祖父が建てた木造2階建てショップハウスで隣町から嫁いできたママが裁縫教室をはじめたのが43年前。マレー人の民族衣装を生徒たちといっしょに作っているうちに、確かな腕が評判を呼び、たちまち人気店となり、今でもハリラヤ前は仕上がりが3ヶ月待ちというほど。ミシンの上で宿題をしたり、切れ端の山の中で遊んだりして育った私たちが思い返す子ども時代には、必ず働く母の後ろ姿があります。今年、この家も老朽化ということでついに取り壊され、店が移転しました。姉の元同僚で、マレー人と結婚した日本人常連客でもあるアティカさんから寄せられたお便りとともに、思い出が詰まった光景をマンガで振り返ってみます。

THE MANGA

陳家物語

仕立て屋編

マンガ Windz Tan　文・構成 TANJC

いつも忙しくて飲み忘れるせいで、氷が溶けてしまい薄くなった出前の「テー・シー・ペン」（練乳ではなく生乳でつくるアイスミルクティー）がミシンの上にあった。

服につけるボタンはその服の生地からハンドメイドする。そのちょい役は学校帰りの私たちが担う。お手伝いに熱心なのはお小遣い稼ぎにもなるからだ（笑）

朝8時から深夜まで働きづめのママにとって、午後3時に昼ドラを横目でみるのが束の間の休息。夢中になって仕事が進まないときもあるけど。

ママが仕立てる素敵なバジュはもとより、人情厚く、家族の結束の強さが尋常でない陳家に惹かれ、今でも家族ぐるみのお付き合いをしています。（アティカ）

山積みの布の切れ端が猫にとって最高のベッドのようで、たまに野良猫に占領される。朝、生まれたての子猫を発見したこともあった。

陳維哲
Windz Tan

漫画家。88年マレーシア・ジョホール生まれ華人。08年来日。文星芸術大学マンガ専攻にてちばてつや氏（代表作『あしたのジョー』）らのもとで学んだのち、東京のビストロで調理補助として修業・料理研究。ファンタジー、戦争、ギャグから少女マンガまで網羅する作品群の中で、ひときわ才能輝くダイナミックな料理描写と人情ドラマが味わい深い。

陳維錚
TANJC

デザイナー、メディアアート作家、大学講師。12才離れた実兄だが、Windzと顔がそっくり。96年来日。東北芸工大映像専攻卒業後、京都精華大学大学院では現代美術を。舞台撮影から、映画VFX、WEBやグラフィックデザインまでマルチにこなすクリエイター。近年数多くの美術カタログ装丁を手がけ、WAUは創刊からデザイン担当。

Hati Malaysia マレーシア文化講座 主催

WAU7号でご紹介したマレーシアの映画を上映いたします

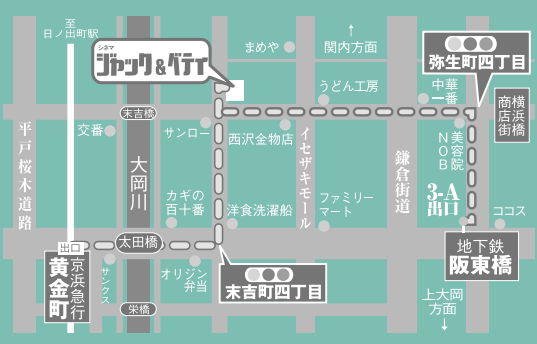
2014年マレーシア映画祭 最優秀作品賞・監督賞受賞・脚本賞受賞
リュウ・センタット監督作品

原題"Lelaki Harapan Dunia"
「世界を救った男たち」上映会

6月25日[土] 14:50（上映後トーク：日本マレーシア学会関東支部）
6月26日[日] 14:50（上映後トーク：Hati Malaysia）

【当日】大人1800円 大専1500円 高校以下シニア1000円
（全席自由席 / ジャック&ベティ会員様は会員価格に準じます）
【前売】大人1600円 大専1400円 高校以下シニア1000円
オンライン販売 http://www.jackandbetty.net/shop/

横浜シネマジャック&ベティ
横浜市中区若葉町3-51
京浜急行黄金町駅5分
市営地下鉄 阪東橋駅5分
電話 045-243-9800
http://www.jackandbetty.net



◆京浜急行線 黄金町駅下車 徒歩5分
◆横浜市営地下鉄 阪東橋駅下車 徒歩7分
◆JR線 関内駅北口下車 徒歩15分
※黄金町駅・阪東橋駅では改札にて劇場までの地図をお受け取りいただけます。
※申し訳ございませんが、専用の駐車場はございません。劇場前の通りのコインパーキングをご利用ください。

協力：横浜シネマ・ジャック&ベティ・なら国際映画祭・日本マレーシア学会関東地区研究会・アート・ラボ・オーバ

マレーシアリゾートクラブ
http://mrcj.jp
マレーシア、ボルネオ地域専門旅行会社
（株）エムアールシージャパン／東京都知事登録旅行業 3-5248 号

マレーシアごはんの会
http://www.malaysiafoodnet.com
日本でマレーシアごはんを楽しむ会

ムティアラ・アーツ・プロダクション
http://mutiara-arts-production.com
文化交流事業の企画制作、通訳・翻訳業

オッドピクチャーズ
http://odd-pictures.asia
国内外映像映画制作・マレーシアロケ

WAU No.7（2016年3月号）に掲載した「自宅で簡単に。おいしいマレーシア料理」記事内、「AYAM（アヤム）社は、1982年創立」とありますが、正しくは「1892年」でした。お詫びして訂正いたします。

編集後記

親戚の高校生が修学旅行でマレーシアに訪れたときのこと。「屋台に鶏が丸ごとぶら下がっているのを見て、友達が気持ち悪くて食べられないって言うの」と。日本人の若者はそういう印象を持つのか…と驚いたけど、私もハリラヤではじめて羊の丸焼きを見たときは、胸がざわざわしたな。丸のまま食べるというのは、命を頂いていることを実感させてくれるのかもしれません。

ごはん **古川 音** Oto Furukawa

ライター。首都クアラルンプールに4年滞在した経験を活かし、「All About」や「CREA」ウェブサイトにてマレーシアの記事を執筆。また「マレーシアごはんの会」にてイベントや料理教室を主催。
古川音 HP　http://www.otofurukawa.com
マレーシアごはんの会 HP　http://www.malaysiafoodnet.com

ある国や地域の文化をとてもよく表すアニメ。これから「ウピン&イピン」などマレーシア発のアニメを通して、伝統的な家屋や衣装、食生活や宗教的な側面、子供たちの遊びなど、日常生活の様子が発信されることが楽しみです。そして、日本を代表するウルトラマンがマレーシアのアニメに登場するなんて、嬉しいですね。日本語字幕付きで日本のみなさんが楽しめる日が来ることを期待しています！

芸能 **上原 亜季** Aki Uehara

ムティアラ・アーツ・プロダクション代表。AFS生として一年間マレーシアの高校に留学。Universiti Sains Malaysiaの大学院にてマレーシアの伝統芸能の研究を行い、修士号取得。国際文化会館勤務を経て、現職。東南アジア芸能コーディネート、イベント企画・制作、記事執筆、マレー語通訳・翻訳。　http://mutiara-arts-production.com

今から10年ほど前、数々の国際映画祭で活躍したマレーシア・ニューウェーブと呼ばれた監督たち。月日を経た今、彼らは、次世代の育成に視野を広げていました。今回ご紹介したタン・チュイムイ氏はその代表的存在。今年のショートフィルムフェスティバル&アジアのアジアンシンポジウムのパネラーとしても来日します。マレーシア映画の現状を直接聞ける良い機会となりそうです。

映画 **高塚 利恵** Rie Takatsuka

映像プロダクション、株式会社オッドピクチャーズ代表。インディペンデント映画プロデューサー。日本国内にて映像によるプロモーションの企画、撮影。マレーシアの映像制作プロダクション（ODD PICTURES MALAYSIA）と連携した映像・映画製作など。
HP　http://odd-pictures.asia

マレーシアの文化情報を知りたい方へ、情報提供・講演もいたします。どうぞお気軽にご相談ください。

Copyright (C) 2016 HATI MALAYSIA All Rights Reserved.